



全勇  
傳婦

繪本更科抄紙

三編

卷之四

13  
977  
14





爛一所三日目おいと美しく成りぬい柵心嬉しくお  
 者お貞るど洗々お次弟くよ膿爛一所乾一七日と  
 一おい元の血姿おあぐせの姫湯峰の茶師如来ま  
 誓て宣よと我貞の元のくおありと悦ぶ夫と再  
 元の姿おあぐせの一心お祈る一七日と一に  
 おし手足動眼おと開きく見回しとよ体扱の茶師  
 の感應ありとらと彌有ぐくおりの浴しとよ  
 二七日お肉くく生し元の鹿之助とい見ゆれども  
 耳聞えと物つふ事叶りよ浴の間お茶師へくとし  
 参し初めと誠お錦繡の中お産ゆいおと踏ゆ  
 事とてはあぐせお夫と思し念カあぐ夜毎く請

ふ心けくくきてく哀く古猪之助の供  
 うんといくゆりく一人請るく古  
 猪之助も路次の狼藉おあぐんとく隠お茶師入堂  
 前お蹲りてお帰と待る九重姫夜毎お請る道  
 色くれ怪しき化物出く姫の道筋と塞  
 三おげとをををれくお恐るく只ゆり  
 くく言て傍と通るおお花のく構くおを跡  
 慕く行のく此化物古猪之助の眼おからけき  
 姫の獨言と宣よとめと思く夜おおお跡お付添ひ  
 堂前お一人の老僧おまて善哉く九重姫お信心

堅固なれば鹿之助の本腰必今晚ふりしん女心ふ夜ぐり乃  
 参詣とをりうんと色く怪しき物と出さるるもこそ  
 皆茶師の方便あり猶も信仰怠る事あらねとこそ信  
 しく失ふ九重姫の感涙を承り立帰るに柵待  
 りけてや姫君悦びの夜ふい初く爰に何國ぞと  
 宣し小寄志くくのよと中上し小早く九重姫よ  
 逢んと待りゆふの目ふり多くとふ小姫いさく  
 茶師の具験ありとふとふりし側へより之は  
 鹿之助快然とやよ九重姫あり久しやと何に姫と  
 猶更片時も心側と離れありつる自もあつたれぬ  
 とはいささとし先立りの涙あり夫より上月の夜丹波

太郎の危難まゝ古猪之助柵諸とも物ぐる小鹿之助  
 驚我徳市が為お汁らも毒酒と吞らりと心附し違ひ  
 覚し其後ハ何事もあらず先やど一人の老僧我に  
 呼て早く歸るべしと宣より心快然と成ると有し  
 事とも聞ひて姫の真心と感し古猪之助が信州  
 の中と森之助の詞と聞慢心と大い後悔りりる扱  
 勝丸君兆典司の情なく東福寺小隠住多し義久も  
 毛利家の吉田小捕りもおとと聞大い悦びいさ  
 天運の盡さる所あり我是より都小赴勝丸とより立  
 再尼子の家と興らん事方寸の内ふりり氣つふ事  
 ちうんと勇立翌日四人打連都とて登りくる



九重姫貞心有馬の茶師立願の茶師姫の心を引くと天怪と

九重姫貞心有馬の茶師立願の茶師姫の心を引くと天怪と

山中鹿之助松永彈正が奴と成話

叔も鹿之助九重姫柵古猪之助諸とも都どろり登り  
 中納言教行卿の館小来のへ中納言及大ふ驚多し  
 鹿之助其外乃勇士尼子九郎左門が為小毒後ふら  
 八重姫の自害一義久ハ毛利一捕りてと関ぬるは  
 九重姫も定まら自害せり入水もかりり候の  
 かしくいもあざざりみかく壯健しく再會せり  
 事のうき一母上諸ともかり付り位なれば  
 鹿之助恐入某不明中一多敵の毒手小落入一も幸  
 やして蕪生と事いまご尼子の運尽され所あり是  
 より東山東福寺一立越勝丸小廻合尼子再興の謀

とあーヤさん 我お三年の厄りまに未旗上す  
 時節ふらば九重姫柵諸とも暫く預り下る下  
 某も名と隠一時の至る追ひりある下賤の奉公と勤  
 臨氣應斐の謀とあーヤさん 鳥の水と納る三度  
 我明と通りあふ内一入事とけきむれは  
 旗上りも追ひ青信りもあふ必氣づいりある  
 古猪之助も暫奴僕とありて何の方より身と忍び時  
 節と待重一とさもいさく述もい教行卿其  
 義氣と感一姫が事い心よりけりる免角將軍家  
 一便り事と謀りくと各小別と告て立出まは古猪  
 之助感心一何国までい供り存ぞれども君の奴僕

と成りし其付添まいつてんあかづし其も  
ある方の奴と成ても三年の厄と果しつて待  
らん時節来るまで不通と思召下るべしと瓢  
然と出れば鹿之助跡と見送りかゝる家来と持  
し我大幸ありと中納言の館と立出東山東福  
寺小来音信お誰と答へて立出る者ハ五月早苗之  
助ありこの鹿之助及ふまゝ若幽魂おはあ  
ざらつと一度ハ悦一度ハ怪しとこれハ鹿之助打笑い  
必怪し一事かたかくの次第もも蘊生し勝丸  
の心事心えう尋来りたりとゆりし事と物ごと  
し早苗之助悦いふまゝと北典司の情ふり勝丸君ら

心安鉢しつて見と姿とくおまします其も飯焚乃  
奴と成て守護仕ると答へれば鹿之助忠臣と感  
早勝丸君小由司おうとせし早苗之助つち  
よく真お入かくと告ふ勝丸北典司も大悦  
早速真へ伴ひあつし事ども語合義久のしつ  
且ハ重姫の自言と悲しと尽せぬこのハ涙あり  
東福寺れ大和尚も立出り鹿之助の忠臣と感  
尼子の再真ハ偏ふ足下の心おあんと宣ハ鹿之助  
謹而某三年の厄あり未旗上る時節ふいば是  
我ハ將軍家の内ふとさく人と主人とを奴  
僕ふと為と替時節と伺ひ九郎左門ハ積忠と訴

寛政八年三月三日

勝丸と再び雷田の城主小をりてんとさうもいさうしく  
 述べたに院主典司早苗之助も悦高橋渡之助秋宅  
 庵之助も上月落城より都ふとさうも高橋と梵論  
 字あり秋宅ハ髪結と身とやつり勝丸君と補佐  
 づりゆと語りて鹿之助悦未尼子の連の尽さん  
 ばやかひる忠臣あゝ事のうまうまも身とやつし  
 奴僕さる上ハ音信もつとたゞ只ハ時の至とす  
 ぬと袖と拂つて東福寺と出づる鹿之助備考に  
 當時將軍家より倭時と得るは松永輝正あり彼ハ  
 大悪不道やして謀殺の志ありかゝる者ふと人妻一  
 の謀ありと心と定め夫より手筋と求め松永輝正ハ章

履とあり時節とまのこゝろあはれなり

浮舟再傾城とあり横道兵庫之助蕪生の話

且説浮舟と藪中茨之助ふそとけらるる漸室の津よ  
 着々しむも茨之助ハ壯人躰小成下りしれハ浮舟只  
 一人傾城浮橋と尋らふ未一年の年りりて勤する  
 かりかりとハ長門屋といへる章臺一行久くおま  
 浮橋小逢家身の上茨之助ハ助らるる事まで  
 つづふ語りしれハ浮橋悦茨之助後事風の便も  
 あらざればつゝありとんと明暮心苦いひ  
 尽ぬ縁とさうそりごと助る事の嬉し  
 艱難とさうし上ハ心も直りやと遅く  
 窓へ逢





以身みみの力ちからも成なり人ひとと其その夜よ茨いば之の助すけと呼よび積つる物もの  
 語ことり袖そでと需もちへるが浮うき橋はし一ひと包つかひの黄こ金うごと取と出だし  
 是こゝとありまゝ衣い類るいも持もち出だす所ところありまゝ借かりて  
 浮うき舟ふねぬ一ひと兵へい庫こ之の助すけ後ごも蕪そ生まらるる中なかりふか  
 頼たのみいれは茨いば之の助すけも浮うき橋はしが変うつらぬ心こゝろを嬉うれし  
 夫おとこより濱はま邊べふ幽うある家い居いと求もとめ浮うき舟ふね諸もろも此こゝ所ところ  
 ふりりて日ひに漁き人しんと海うみ出いて漁きと業わざとなると里さと  
 人ひとも茨いば之の助すけハ社か家けの子こ息いきと事ことと知しる由よしいと哀あはれ  
 懇こんふ漁りの業わざと教おしへる由よし今日けふ日ひい少すくづの銭ぜにと取とり  
 浮うき舟ふねハ手て馴なぬううきとか一ひと哀あはれ煙けと立たるる爰こゝより  
 肥ひ後ごの国くにの名な醫い亀かめ井い道みち清きよといふ人ひと此こゝ室むろの津つ小こ船ふね待まち

の徒つと然ぜん長なが門かど屋やが方かた来きり浮うき橋はしと酒さけの相あ手てふか  
 へよて西にし国くに第だい一いつの名な醫いと事ことと聞きぬも人ひとあき折おり  
 兵へい庫こ之の助すけがうと咄はなし骸が骨こつの如ごとく見みえいと一日いちにちに  
 米こめ三さん粒つぶ口くち入い置まけつ脈みやくも絶たつ身みふりつと  
 も何なにとぞ本ほん腹はらの術じゆつもいづ心こゝろ情なさけふ施ほへる  
 真ま實じつとありつと其その病びやう人ひとと見みて茶ちや法ぽうもりつと一ひと連れん来き  
 是こゝよとらぬお浮うき橋はしううきと一ひと禿かぶと浮うき舟ふねが方かたつと  
 かく言ことせりつといづ古ふる葛くわ筆ふでへ入いり浮うき舟ふね脊せき負お米こめ  
 りて祢ねんんぐらううきとくくれれば道みち清きよ病びやう人ひとと見みえいと一ひと見み治ちやう  
 是こゝは正ただしく斑はん猫ねこの毒どくふ當あり物ものありと見みえいと一ひと見み治ちやう

とらふ白き鱧の肝と茶を合して用るは必平愈  
 といふ白鱧ハ班猫と食と見れば白鱧と得る  
 ときり此とらふは肝合して用ゆは一貼乃茶  
 と都合してゆへに浮舟大ふかと得有ぐ  
 押頂と我家小歸り茨之助も語るも中く白  
 鱧のゆへに心と惱し其頃室の明神ふ  
 開帳ありておびしき茶指群集し色ハ  
 の見せもの機関或ハ芝居おど數多しりて中  
 長廿四尺むりの白き鱧と見せものふてありと  
 浮舟岡出是と雪よりも白き鱧のゆへに  
 色くの虫と事二三尺上置ふ飛鳥の如く飛上

て其虫と喰ふ真のりて人に見物を浮舟も是  
 と見よりり夫の病と本腹とせん朝暮佛神  
 祈し甲斐りてゆへに此所白鱧の来る事の有  
 茨之助ふ此事と語向平此鱧を買取んや  
 見せ物の親方相終と親方中く閑入と是ハ  
 らが命と繫ぐ宝ありいれども賣事あると受引  
 祓ハ浮舟跡心と程よても何を買つてまひ  
 うつと茨之助と頼るゆへに茨之助親方ふも頼  
 らんはまうは金五十両ふ進ど一夫とても  
 賣ぎき心ハあはれも足下の余り親切に宣ふ  
 の金子持参あはれ賣渡しさんとす茨之助

立歸く進み致し来りしもの身も我等も一月の食  
 事ありし身もいづれも事ありし太や成  
 息と継い浮舟の暫沈吟して有るが其金の之面もあれは  
 晩方迄言延しつれと長門屋の方へ行て何卒奴家と金  
 五十兩小仏買下されしつゝふ亭主驚いりし難波新町  
 ありし浮舟といひて全盛さる者ありし今ハ少一年  
 かけて散がての花もいづれも随分五十兩ハ貸つ  
 併木偶人のつきかき兵庫之助といふ夫りり得と思案し  
 るといふし浮舟涙ふいせびるれば其夫の病氣本腹さ  
 せん為ふ再び川竹の流ふ沈むも不便と思しり  
 五十兩といひまるといふと位に亭主も哀と催し

三年の苦界あて五十兩貸づしと涙之助と親判とあり  
 けし涙之助浮橋も驚いし思諾しり浮舟が面趣  
 るれせんといふ三年小賣渡し五十兩受り涙之助  
 は彼見せ物師が方へ立越金と渡し白糰と受り歸るれば  
 浮舟悦白糰の肝の茶と和して木偶人のつき骸骨  
 一此茶とつき込め不思議成我此茶咽喉と過や否わつと  
 言て數塊の虫と吐く小浮舟心嬉し又一口とつき込め  
 眼と開き浮舟といふありしとつゝ嬉しと限り多く  
 終ふ一盃の茶とゆゑ仕まつれば兵庫之助起上りし  
 やし浮舟恙ありし此人はいりある人ぞ爰ハ何国そし  
 問に浮舟ありし事ども物語白糰の為小五十兩小身



賣再び苦界ふ況いいとさめぐ泣くれば兵庫之助も大  
 不驚之次之助小厚く礼謝し浮舟が節儀と感づるを  
 かゝる夏といふちりり古の兵庫之助ありは五十両ハちり  
 菘のく、忍し小女房小勤奉公とせり口惜けれ去  
 かり鹿之助後の生死も斗りこれハ京都中納言教行  
 卿の縮一立越尋ゆるも志事あり事あり勝丸  
 君此世おきりまゝ取立り籠上り再び尼子家と興す  
 一其時ハ今の難儀と昔話おもん問志しと思ひ  
 勤吳よと涙不咽ハ浮舟ハちりりもいも悲しと抑  
 隠し中し我勤奉公ハ物の數ハ一日も早く尼子の再興  
 と斗り我ハ今宵勤小出まば次之助後と頼て志づく

肉の生とると待て出るいとさめぐ止まらぬいやはらあり  
 杖しとちりり都一立越一鹿之助後と尋ぬ命一次之  
 助後我世小出あば此恩と報じし人一日後時ハ一日の  
 不忠ありと杖とカ一立出まば次之助とちりり止まらぬ  
 きいといふとちりりやこととちりりいもさめぐり  
 鹿之助銀閣寺ふら雷獸以捕る話  
 鹿之助ハ松永璋正久秀の奴とあり名を早助と改めまゝん  
 ちりり仕一これハ松永又おき者と思ひ士ふちりり立まらぬ  
 ちりり役も立命者と士ふちりり進こといふも  
 早助何分草履ちりりの外役お立者ふあはんと憚返して  
 ちりり中間とちりり時に至ると待ちたり或ちりり將軍

義輝公銀閣寺へ成りての事  
 祝之助細川兵部太浦藤高松永輝王久秀其外大名  
 小名威儀嚴重小伺公して納涼の宴と催し  
 比叡山の頂より黒雲一群起ると見え一雷声大響  
 松永輝公の老煉の勇士あり有れども生得雷  
 と怒り事甚しこれ俄小顔色土のど慄として  
 ありこれ義輝公笑はせり物も動ぬ男成小  
 雷と怒り事の甚し松永吞す百万の軍勢よりも  
 怒り雷の事と有る事ありて有る事ありて各目引袖ひき  
 笑い叫びき時一声の霹靂天地も碎るるなり  
 車輪のくき火の玉庭前小落内殿へくけり

各將軍とり巻つて抜く追拂ふ此光少や怒り  
 庭前一萩ゆり大木の松のりりり小登らん  
 松永草履取早助庭前より庭前小蹲りてあり  
 飛つて彼車輪のくき物とむづ抱く此時火光を  
 黒雲小衆して上り早助小くまき者半残りけり此  
 獸身と述ゆんと大きある丸とり早助小つくと  
 うと事とせし終り押す用意の縄とて  
 つまみ殿の將軍始雷鳴の静りしに漸人  
 心地して義輝公の恙なきを賀し参らるるに庭前  
 小物音し藤高椽側小立出て御覽は一人の  
 下郎怪しき獸爪膝小引しき縄りし

藤高声とけ何者かると宣へば是ハ松永彈正が草履握ぬ只今の雷と生捕れと高らつ小呼はる不  
 將軍始各膽とき一庭一下多いて見ふ小頭ハ龜の  
 其勇氣と感どろい汝下郎の身しつての怪歌  
 と生捕事手柄をり上意行り早助らむ  
 平伏して藤高の方小向い人非人同前の下郎上意  
 と下ろし事真加至極し言舌くわらに見えろ  
 將軍よく器量骨柄の凡あつてはめて下郎ハ  
 へ押さきわけらり上意行り此時松永彈正漸人心  
 地つて早助の雷歎と捕し事と知り將軍の褒美の

上意と有つての請ひし時不岩成主祝之助勸  
 出て此下郎雷歎と捕し手柄あはれも  
 不審なりき名つが頼魂只りの小りば捨儀せん  
 早く早助ちつても恐ろろ気色なく下郎ハ主人松  
 永彈正日頃雷と撞ひゆく只今の霹靂定て心痛  
 任らん夫の心小う下郎のまいるまじき所ハ  
 ぞんドなが思はず庭前一来る事恐入る此上ハ  
 いかの由外と蒙るも更小恨と存ぞ只主人  
 松永りしと知く將軍の由座あるまじき詞  
 涼しく迷はば將軍よく感トさせむ下郎ハ





嚴  
司  
小  
逢  
い  
ま  
す  
画  
像  
の  
マ  
ノ  
と  
向  
ふ

北  
曲  
司

鳥  
居  
三  
傳  
三  
編  
卷  
八  
四



白  
ら  
や  
姫

ほ  
が  
祢

鳥  
居  
三  
傳  
三  
編  
卷  
八  
四

似ぬ忠臣彈正ハよき家来と持くり此者我小得させ  
よ上意有りしハ松永大小扱ひ敷ありぬ下郎と  
さほど御懇望下さるる愚老小於く有ぶとき仕合  
早助汝ハ仕合者かりぬ直参と成將軍の草履と  
つらむ冥加至極えり勤も夫より義輝公の  
草履とりとるりて時節と伺ひくら雷黙ハうつ不船小  
兼西の

兆典司の名画白綾姫の魂と動く話

兵道子の龍雲小葉一金岡ハ馬狭ハ喰上其名手  
小至ハ神品のものと所疑ハ益き小ハ爰イ  
將軍義輝公の妹君白綾姫とハ慶壽院の御

腹小出生ハ心とハ三五の月の白天性画と  
好ませ多ハ藤原の信實ハ弟子と成大和画と  
ふふ絶妙及ぶものかハ慶壽院ハたいつく  
なひ姫ハ心ハ叶ふ者ハも下賤の者なり  
聳小せんと七百町の化粧田と付り頃日ハ不例小  
よつらふ心と慰る中ハ其頃の名画試つ  
めう其人ハ僧雪舟ハ雪周文藤原の信實持  
野大炊之助ハ信親子相阿弥父子各筆と震ハ人物花  
鳥山水と画ニ奉る其中ハ僧明兆ハ思ハ子細有  
て尼子勝九ハ姿と生るが画ハ上  
此日大廣間小ハ其甲ハ見ハ

誠心と疑い認り画をらん何考はなかりける其中に  
 東福寺北典司が画一櫻の枝と手折て持し見乃  
 画と姫君のくりにりくさせぬひうる美人も世小在  
 るみふし目くまきせば詠めりひしが夫より此画  
 執心し恋の病となりきふしそはやなれ此  
 事と早くも局察しこれハ母慶壽院ふまうせ  
 まつろくしれはうひく姫が心し叶ふ者あは賤者な  
 るもも聳ふなをもとと將軍義輝の朱印あの上  
 ハ其繪姿とりし尋ねばとありこれハ局兼り先  
 明也と召して其身頃日画合し認めし見ハ誰人  
 の公達と心ざして怒りやまうこハ繪をくごしめりや

はくまにすさせ多くし典司仕濟しきりや  
 是ハ我寺小所系勝丸と中見の庭前乃まうと  
 手折し西悠し艶しこれハ不斗心ふ浮く  
 一も終いと小局と悦其児ハいりたる人の  
 児を典司謹而見と尋ねよハ何の子細ふや實  
 とり明しなび野僧も實とりて答へりしん  
 局声とかくししてこれハ頃日其身の画多し  
 画とが小姫君執心し煩はせぬハ母慶壽院  
 いうあふ人の子よても姫が心し叶ひし者と聳ふ  
 も金しと宣ふより尋りなり其児の素性  
 委し語りなるといふしハ其事ふし中と

貞女全傳三卷之二

りも明一ヶ所ん此兒へ西国十一列の大守尼子  
 晴久が孫式部太輔義久が母中納言教行の  
 娘おくれが逆心尼子九郎左工門が為小国と奪れ  
 漂泊の身となりぬゆゑ我寺ふかくまひ置れと  
 つづららるる物ごりきき心腐悦よるへず姫君  
 の恋まじひるゝや道理おきこくやんとなき  
 上吉日と撰び所興入あまきり僧とくくり  
 尼子と再び裁さん此くびの縁組ありと忠臣の  
 輩もくくかこにひひて勝丸と守護いこせ此の

慶壽院ふくくや上るる母公姫君の悦  
 由緒礼一き人と恋得一こそくくし義  
 輝公つも上るる將軍も喜悦あり吉辰を撰  
 中納言教行卿を後の親一興入ありは將  
 軍勝丸と召出の覧らるる小繪より勝り  
 威風凜凜として大將の器備りる悦  
 の余りぬ手づく和冠り徒五位上より下れ  
 尼子四郎勝久と号する勝丸大悦び逆臣九郎左  
 衛門が為父の毛利小と埋き未とあり果  
 某くぬ懇命下るる事生前の面目一日も

早く九郎左衛門と亡く父ととり返す  
 願ひまへば將軍いよく其心ごとく感  
 志むく都へありく危子の殘黨と  
 不日小雲州へ發向はる魚いと慶壽院も  
 對面はる小画小見夕ひよりいつくけ  
 姫君の悦大くあはれ深聞ふ入る千代八千代と  
 契りまへばいと聞傳ふ大名小名或はく  
 或は恐ま門前小市とやうらうらと美しく  
 とき五月早苗之助も勝丸も附添威勢日く  
 いやまゝとさめとくくく

繪本更科草紙三編卷之四

